

明石高専 同窓会通信 第 11 号

〒674-8501 明石市魚住町西岡 679-3
明石工業高等専門学校・同窓会
TEL・FAX (078) 946-6186

目 次

回想の高専時代 -自由と規律と人間形成-	高野 治 1
明石高専創立 50 周年を迎えるにあたって	京兼 純 3
明石高専の近況・2012	八木 雅夫 5
創立 50 周年記念事業のご案内とご協力のお願い	中井 優一 6
お知らせ	7

回想の高専時代 -自由と規律と人間形成- 電気工学科 1 回卒 高野 治

昭和 37 年 4 月 1 日「国立学校設置法の一部を改正する法律」により、最初の国立工業高等専門学校 12 校が全国に設置され、私は当校に入学することになった。入学の動機はごく簡単で担任の先生の勧めで腕試しのつもりで入学試験を受け、たまたま 30 数倍の難関を突破し合格したからだ。

通常より 23 日遅れの 4 月 23 日、廃校跡の兵庫県立農大のボロボロの仮校舎（もっともこの校舎は 1 年でおさらばで、翌年には新築の校舎、寮に移ることになっていた）において開校式及び第 1 回入学式が挙行された。130 数名の新入生と父兄、教職員とこじんまりしたものだった。まだ少年期を脱していない 15 歳の生徒の引率経験がなかったのだろうか、鍛冶、片岡、谷本、各先生方の戸惑った顔があった。

本校は全寮制との事で、当然私も大阪の地を離れ入寮することとなった。それも教室を改良した俄か作りの寮だったので、全員を収容できなかったのだろうか。近隣者は自宅通学だった。入学式の 3 日前に入寮となり、教室を改良した 8 人部屋、パイプの 2 段ベッド

が 4 つ据え付けられていた。既に部屋が割り当てられており、先着者が既に 4, 5 名到着していた。簡単に挨拶したものの、中学を卒業したての狭い地域社会で育った者ばかりで、気まずさだけが残った記憶がある。寮生活はいたって規則正しく、朝は寮生全員でのラジオ体操に始まり、夜は 10 時に消灯が厳守だった。消灯については寮生同士の諍いが絶えなかった。また寮生による夜回り等も行い自治の精神を培うことが出来たと思う。

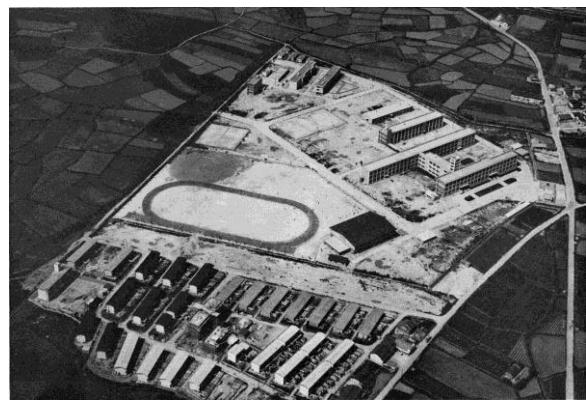
入学式も終わり、本格的に授業が始まった。最初に驚いたことは、今までに経験したことが無かった、3 学科全員の階段教室での授業だった。ところが数学の授業が一向に始まらない。毎回休講である。やっと数週間経って初めての授業があった。それもいきなりノーネクタイ、しわしわの背広を着た身長 180 センチ位、水ぶくれした、額から上が非常に長い寸胴頭の M 先生が来て、いきなり集合論とか、n 次元空間解析とか言うやつを黒板一杯に書き、喚きちらしながら講義を始めだした。今までの中学では、数学といつても算数に毛が生えた程度のことしか知らない、我々は度

肝を抜かれた。M先生は「俺はこんなところで君たちに数学教えていられるか」というのが口癖で我々を小馬鹿にしていた。私にとってこれが癪でたまらなかった。舍監としの当直の夜、M先生に一矢を報いるため、深夜いたずらを仕掛けた。満々と成功し、先生を震え上がらすことができた。数日を経て我々の行動はM先生の知るところとなり、教官室に呼ばれたが、たいしたお咎めも無く、それを機に、非常に親しくしていただいた。M先生は1年を待たずして母校に帰った。おかげで数1はほとんど勉強せずに終わった。

仮校舎生活もようやく1年が過ぎ、夢にまで見た本校舎に移転した。敷地を含め建物はまだ工事の途中だった。その中に必要最小限の校舎1棟、学生寮、公舎等が各々ぽつんと建っていた。雨の日の寮から校舎までのぬかるみはひどいものであった。特にグラウンドはひどい状態で数日間使用不可だった。また公舎での先生方の生活を間近に見、接することができ、大きな安心感と、親しみが持つことができた。

高専は5年間の1貫教育を通じ中堅技術者の養成を目指すということであったが、その中堅技術者の養成とは何を意味するものであったのか。単なる高度成長期の経済界要求を鵜呑みにしただけではなかつただろうか。実際は、追い越せ追い抜けとは言わなかつたものの、大学に負けるな、と叱咤激励の中、全くの詰め込み教育であったと思う。製図や実習等を含めかなりハードなカリキュラムだった。また5年間を通じ3学期制で中間試験、期末試験と試験に追いまくられていたように気がする。技術は単なる知識の上に成り立つものであろうか。確かに基礎知識をみっちり学ぶことは必要であるがやはりそれらを基に創造的な方向へ進むべき糧でなければならないと思う。

もともと新体系の学校であったために十



創立当時の校舎と新聞記事

分に学校の内容を理解していなかつたり学力的について行けなくなつたりして、やむなく進路を転換した学生が1, 2期生に多く出た。ちなみに私のクラスメイトは45人入学したが卒業時には33名だった。1名を除き他の全員は就職した。

その高専は、今では有名大学の予備校となっているようだ。この50年大きな社会的な流れがあったとしても高専の設立趣旨を考えると寂しい気持ちがする。しかしながら当高専は他校に先んじ専攻科設置等、社会や経済環境の変化に対応した高専教育に取り組み、本校独自の活動や個性化を模索されている事は大いに期待するところである。

また記憶に留め、忘れてはならないことは学校の創設記、すなわち礎を作るのにご尽力下さった、村田校長、鍛治、片岡、谷本、先生をはじめ、先生方を支えた教職員の方々です。社会的な注目と、十分なスタッフが揃っていない中、未知分野である、5年制教育カリキュラムの作成。特にスタッフの問題、専門科目もさることながら、一般教科講師の選任、また限られた予算での各種設備の充実等にその御苦労は大変なものだったでしょう。改めて今50年前を振り返って見ると、海外のリーダー養成校ボーディングスクール「全寮制学校」を模した高専においては、今の教育ではあまり聞かれなくなった、人格の陶冶と学力の養成を目指した社会性豊かな教育システムであったと思う。今後この様な教育システムの再構成が社会的ニーズとして出てくるであろうか。最終学年時、寮長を仰せつ

かり、300人からの寮生の食事の改善、風紀、規律問題等、特に寮の自主性に取り組み、当時の教職員の方々にはご迷惑をかけましたが、5年間の寮生活に辻褄あわせができたと思う。いずれにせよ15歳から20歳までの多感な青少年期に寝食を共にしながら、一生の財産となる交友関係が構築できたこと、また寮生活を通じ最低限の規律を守りその規律の上に自由があることを学んだことは私にとって、かけがえのない大きな財産となつた。

我々1期生も学校創立から50年、その社会的使命も終ろうとしています。一本の小さな苗木の枝を張らせ大木に育てあげようとしてくださった、学校関係者に深くお礼を申し上げますと共に、母校のさらなる発展を祈念しています。

明石高専創立50周年を迎えるにあたって 校長 京兼 純

同窓会の皆様には、ますますご健勝で多方面にわたって、ご活躍のこととお慶び申し上げます。私自身は明石高専に異動となり4年が過ぎ去り、昨年から高専機構の理事職も兼務し、東奔西走の日々をおくっています。

さて、皆さんもご承知の通り高専は産業界からの強い要請に応え、昭和36(1961)年6月に学校教育法の一部改正によって、中学卒業段階から5年一貫教育により、6・3・3・4制とは異なる教育体系で、優れた実践的技術者を養成するための高等教育機関として創設されました。昭和37年4月に第一期12校が開校し、明石高専は12校の一つとして開学され、今年で創設50年を迎えることとなりました。平成4(1992)年には2年制の専攻科が設置(明石高専は平成8年)され、新しく7年間を視野に入れた教育体系の確立を目指しています。専攻科は高専教育を根底か

ら大きく変える制度改革(研究活動が明記)であり、当初は海の物とも山の物ともつかず手探りの状態でスタートしたのですが、一期校から12年たって全高専が専攻科をもち、その存在価値が認められました。平成16(2004)年に55の国立高専が国の行政改革によって、独立行政法人国立高等専門学校機構として一つの法人となり新たに出発し、本部が八王子(東京高専の隣接地)におかれました。平成19(2007)年は、高専にとって実に16年ぶりで発足した中央教育審議会大学分科会・高等専門学校特別委員会で専攻科も取り上げられ、専攻科の充実が謳われ大きな柱ともなっています。明石高専を含め国公私立全体では、30万人を超える有為な人材を世に送り出し、各界から高い評価を受けています。

これを裏付けるものとして、平成21(2009)

年に OECD から調査団が来日し、「日本の高等教育に関するレビュー」を行い、そのなかで「高専はハイレベルの職業訓練の質のみならず、産業界への対応において国際的に称賛されている」、「我々は高専のマネジメント、質およびイノベーションに感銘を受けた。」という内容の報告書が提出されています。また、昨年 10 月 14 日のワシントンポスト紙に “With workplace training, Japan's Kosen college bridge skills gap” の見出しで高専教育が取り上げられました。記事は冒頭に日本の経済状況が芳しくなく、また人口が減少しているなかで、なぜ求職が常に 20~30 倍もあり、50 年を経過した現在においても米国や日本の高等教育機関のなかで成功しているのかを特集しています。こうした OECD の調査や世界的なメディアが特集記事として取り上げるなど成功の要因の一つとしては、各界で活躍している先輩方の頑張りによって築き上げた実績や、高専が現在まで進めてきた教育と研究活動などに振れがなかった証左であると思っています。

しかしながら、設立時からの成功が今後も持続していく保証はありません。そこで明石高専では 50 周年を契機にして、ポスト 50 年を見据えた人材養成を考えています。同窓生の皆さんに送付しました「記念事業趣意書」にもありますように、明石高専ブランドを構築することを事業の柱としています。その柱としては都市型高専の特徴を生かし、「ものづくり教育と複線型教育」を基盤としつつ、国際化や地域連携活動などを視野に入れた人材像の策定です。さらなる活性化と高度化を目指した具体的な人材像の策定には、現在、

機械工学科・森下智博教授をワーキンググループ長とし、各科代表者によって鋭意検討をしています。幸い本校では、平成 16 年度から始まった文部科学省の学生支援事業などで、「ソーシャルマーケットを利用した学生の育成」や「地球観測衛星情報を用いた系統的環境教育」、高専機構教育改善・改革推進経費による「医療・福祉・環境と工学を融合した新分野に展開する教育プログラムの構築」に関する各種プロジェクトが順調に動いており、また近畿地区国立 4 高専が連携した国際交流関係「グローバルエンジニアの育成事業（代表：明石高専）」の推進経費も機構本部に申請しており、人材策定の基盤は整いつつあります。これらの取り組みを通して地域社会に貢献でき、環境教育にも視点をあてると同時に、技術・工学系分野において多様な資質と広い視野を持ち、社会や学術の発展に貢献できる豊かな人間性を備えた、グローバル人材の養成に努めていきたいと思っている次第です。

最後になりましたが縷々述べてきました諸事業を支えるためには、多額の経費が必要となります。そのためには節目となる 50 周年記念を活用して同窓生の皆様から浄財をたまわり、明石高専協力会を設置して資金を管理し有意義な運用を図っていきたいと考えています。本趣旨をご理解いただき明石高専の持続的な発展のために、同窓生の皆さんから温かいご協力とご支援をたまわれば幸いに存じます。それでは皆様のさらなるご健闘とご発展を祈願しております。

明石高専の近況・2012 建築学科（建築8回卒）八木 雅夫

卒業生が母校を訪れると、在学した頃と同じ明石高専のありようを心のどこかで期待するのですが、校舎群の大きな骨格は変化していないものの、キャンパス内では、ハーディソフト両面、環境も人々も変化していることに気づきます。ここでは、近年変化しつつある部分を中心に紹介し、近況とさせていただきます。

昨年、本館西側部分と都市システム工学科棟との間にあったテニスコートは、学生会や高専祭実行委員会の学生が中心となった環境改善提案の実践により、ステージ状のウッドデッキが付属した芝生広場に生まれかわりました。ここは、高専祭で「シンサイミライハナ」プロジェクトの会場にもなりました。福利施設1階にある学生食堂は、学生の提案に基づきパントンチェアやセブンチェアの並ぶ開放的な空間に模様替えし、営業時間帯以外は自習室として使用できるようになっています。

冬季、専攻科棟の入口付近から2階にかけては、1階に設置された薪ストーブが暖かな空間を生み出しています。専攻科棟の周囲では、毎朝、学生が薪割りをし、校内で刈り取られた雑草を集めて堆肥がつくられ、食用にできる植物が栽培されています。河川を浄化する働きもある竹炭を生産するための機器も設置されています。

明石高専は、昨春より教育・研究・地域連携の三本柱からなる学校としての「使命」を掲げるようになりました。教育面では、明石高専から7人が東大編入学に合格した進路実績が昨年1月に新聞記事となり、進学校のイメージが定着した感がありますが、国際的に活躍できる実践的・創造的な技術者を育成する教育の基本的な道筋はしっかりと根づいています。

研究面では、博士学位を取得した教員が全体の8割を超える現状を反映し、多様な研究が積極的に展開されています。学校として文部科学省や国立高専機構の公募事業にも積極的に応募しており、現在、「地球観測衛星情報を用いた系統的環境教育」と「医療・福祉・環境と工学を融合した新分野に展開する教育プログラムの構築」のプロジェクトが進行中です。

地域連携面では、明石市産業振興財団や技術者集団ACT135と協力して地域の企業ニーズの掘り起しが行なわれ、文部科学省の学生支援GPを継承した「ソーシャルマーケットを活用した学生の育成」プロジェクトが動いており、東播磨地域を中心に理数系教育の新たな試みや日本一多いため池の整備活用、大中遺跡での堅穴住居復元、地元連合自治会を核としたまちづくり等に積極的に参画しています。

明石高専では、もったいない精神でストック活用型の施設整備が行われており、なつかしいスポットをみつけだすことはできますので、近況を自分の目で確かめていただくのが一番と思います。2012年は、明石高専が創立されてから50年を経て、記念事業が展開される年にあたります。これまでの50年をふりかえり、これから50年を展望する貴重な節目の年です。同窓生の皆様には、創立五十周年記念事業へのご協力ご支援を切にお願いする次第です。



現在の福利施設1階学生食堂

創立 50 周年記念事業のご案内とご協力のお願い 電気情報工学科 中井 優一

電気情報工学科の中井優一と申します。創立 50 周年記念事業（以下、本事業）の募金事業を担当いたしております。

既に皆様のお手元には本事業の趣意書が届いていることと存じます。また、早速募金にご協力いただいた方も多数おられることと存じます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回、明石高専同窓会通信に原稿を掲載していただく機会を与えていただきましたので、いま一度本事業についてご説明させて頂くと同時に、募金事業への一層のご協力をお願いいたしたいと存じます。

皆様ご存知のように明石高専は昭和 37 年 4 月に国立高等専門学校一期校として創立されました。以来、半世紀に渡り有為な人材を輩出し続けております。その数 7,000 名弱にのぼり、産業界をはじめ社会から高く評価されております。現在の就職氷河期などと言われる時代におきましても明石高専に対しては数多くの求人をいただいており、我々としても嬉しいかぎりでございます。これも、偏に皆様卒業生のご活躍のおかげであると深く感謝いたしております。

明石高専では、このような過去の輝かしい実績を踏まえ、さらなる発展を目指して「明石高専ブランド」を構築することをメインとした本事業を実施することといたしました。

さらに、本事業を遂行するために募金事業を実施いたしております。募金については、本科卒業生・専攻科修了生、現・旧教職員、

在籍学生の保護者あるいは企業各社にお願いしている所ですが、昨今の厳しい経済情勢から企業関係からの募金については多くを期待できないものと覚悟いたしております。卒業生の皆様には日頃から明石高専の運営、教育などに多大なご協力をいただいている所ではありますが、本事業につきましても趣旨をご理解の上、一層のご協力を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。

本来であれば、募金に関して明石高専から直接卒業生の皆様一人一人に対してご協力ををお願いしなければならない所ではありますが、個人情報保護法の関係もありそれが難しい状況にございます。そこで、大変心苦しいことではありますが、同窓会のご協力をいただきながら募金活動を進めております。ご理解をいただければ幸いでございます。

また、記念誌あるいは記念誌（CD 版）については募金とは独立した形での販売も予定しております。価格など詳細につきましては、決定次第本事業のホームページ（本校ホームページ、<http://www.akashi.ac.jp/>から「創立 50 周年記念事業」のロゴをクリック）に掲載いたします。

さらに、記念式典・記念講演会と同日に開催いたします祝賀会には懐かしい旧教職員の方々や多くの卒業生が参加されることと存じます。また、笑福亭銀瓶氏（電気工学科 22 回生）も参加される予定になっております。皆様お誘い合わせの上祝賀会にも是非ご参加いただきますようお願いいたします。

お 知 ら せ

各種コンテストの結果

- 第24回全国高等専門学校ロボットコンテスト（ロボコン）近畿地区大会の結果
アイデア賞・特別賞「Octagon（オクタゴン）」（全国大会出場ならず）
- 第22回全国高等専門学校プログラミングコンテスト（プロコン）の結果
競技部門「よみがえれ、世界遺産」
1回戦：1位／10チーム（準決勝進出）
準決勝：4位／10チーム（決勝進出）
決勝：9位／12チーム
- 第8回全国高専デザインコンペティション2011 in 北海道（デザコン）の結果
環境デザインコンペティション部門：最優秀賞（文部科学大臣賞）「デ木ボ木」
空間デザインコンペティション部門：最優秀賞（北海道知事賞）
「LAVATORY — local foothold —」
ものづくりコンペティション部門：優秀賞「KAIKA する楽器」
- 第5回近畿地区高専英語プレゼンテーションコンテストの結果
スピーチの部：3位、4位

明石高専同窓会からのお知らせ

平成23年度明石高専同窓会役員会議事録

日時：平成23年10月30日

場所：明石高専テクノセンター会議室

出席役員：澤田会長以下理事、在校幹事25名

1. 会長挨拶
2. 明石高専創立50周年記念事業の概要説明（友久副校長、在校幹事）
以下の説明があった。
 - ・ブランド構築（正門、ロゴ、学科カラー）・記念式典・祝賀会・募金の依頼
3. 募金に関する同窓会寄付の依頼について
会長より標記の説明があった。
会員役6000名のうち1/3の寄付を見込み1000万円＋各科同窓会＋後援会等から寄付を募りたいとの学校の意向である。同窓会として寄付に協力することになった。会長（幹事と協議）と寄付委員会により進める。
4. 同窓会の他事業について
 - ・名簿の発行について質疑があった。過去の議事で発行しないことになっている。会員情報の管理は現在も行っている。
 - ・次回総会開催について動議があり、創立50周年記念事業とあわせて開催することになった。内容については会長、幹事に一任することとした。

萌友会からのお知らせ

現在（平成 23 年 3 月 31 日）の会員数は 1681 名です。

【活動】毎年 1 回の会報の発行・送付および役員会を、また約 5 年に一度の総会を実施しています。

【お知らせ】現在 500 名余の会員の方が、連絡先不明となっております。一人でも多くの会員の皆様に会報を通じ、萌友会や都市システム工学科の近況などをお知らせしたいと思いますので、各卒業回の理事の方または萌友会事務局へ連絡をお願い致します。

なお、平成 25 年 5 月に次回の総会を予定しております。今後の会報およびホームページでの会告をご覧ください。

事務局メール : naito@akashi.ac.jp または、tomohisa@akashi.ac.jp

事務局 URL : <http://www.akashi.ac.jp/contents/Civil/OB/index.html>

平成 21 年 3 月末日で退職される先生

機械工学科 助教 本村 土郎 先生

事務局からのお知らせ

(1) 会費の納入について 会費未納分がある方は、数年に一回の会報郵送時に同封の振り込み用紙を利用してご納入下さい。

(2) 住所変更等の連絡について 住所などの変更がございましたら、お手数ですがハガキ、FAX あるいは E-mail にて下記の同窓会の事務局の方へご連絡下さい。

(3) 原稿募集 同窓会通信の原稿を募集しています。同窓会への注文、近況報告など何でも結構です。下記事務局宛にお願いします。

同窓会事務局の電話、FAX を設置しています。不急の連絡は下記の窓口へお願いします。なお、留守番電話と FAX の処理は 1 週間毎に行いますので、緊急の連絡は在校の幹事までお願いいたします。

〔在校幹事〕

友久誠司（土木 4 回）tomohisa@akashi.ac.jp

八木雅夫（建築 8 回）yagi@akashi.ac.jp

國峰寛司（機械 16 回）kunimine@akashi.ac.jp

江口忠臣（機械 20 回）eguchi@akashi.ac.jp

藤原誠之（機械 25 回）s-fuji@akashi.ac.jp

莊所直哉（建築 28 回）shojo@akashi.ac.jp

新井信馬（電気 34 回）nisimura@akashi.ac.jp

田中誠一（機械 36 回）s-tanaka@akashi.ac.jp

西村巖生（機械 39 回）nisimura@akashi.ac.jp